

言語における性一致の傾向が性的少数派の言語使用に与える影響と可能性

—スペイン語とドイツ語の比較—

外国語学部 スペイン語学科 4年

永田 滉

はじめに

ヨーロッパの言語の中には、文法に「性」を持つ言語が存在する。特に、性一致の傾向を持つと言われる言語では、人に関わる名詞の文法的な「性」(gender)と指示対象の生物学的な「性」(sex)を一致させる傾向が強い。つまり、指示対象の「性」が男性であれば名詞の男性形を、女性であれば女性形を用いて性一致を行う。

近年、多様な「性」の在り方を認める動きが見られ、あらゆる「性」の在り方に誇りを持っている性的少数派¹の存在がメディアなどで取り上げられるようになった。また性一致の傾向を持つ言語においては、性的少数派の要求に応じ、「性」の明示を回避する表現が提案されてきている。このような社会や言語の動きがありつつも、言語における性一致の傾向は保たれると考えられる。しかし、性一致の傾向が性的少数派の言語使用に影響を与えていると仮定すると、性一致の規則を用いずに「性」の明示を回避する表現を生産することは許されるのだろうか。

この論文では、「多様な『性』の在り方を尊重する」という筆者のジェンダー観を基に、文法上の「性」が与える性的少数派への影響について述べる。対象とする言語は、性一致の傾向が強いヨーロッパの言語の中で、名詞に「男性」、「女性」、「中性」という文法的な「性」を持ち、比較的造語力の強いドイツ語²と、名詞に「男性」と「女性」のみを文法的な「性」として持つスペイン語³である。その上で、異なる語族から生まれた両言語に見られる、性的少数派に対する新たな語形成の試みを比較し、語の形成過程の考察から、「性」の明示を回避する表現の可能性について論じていく。

1. ドイツ語とスペイン語の「ジェンダー」

1.1「言語とジェンダー」

本題に入る前に、「ジェンダー」という言葉の定義と、「言語とジェンダー」の研究が行われている背景について述べたうえで、ドイツ語とスペイン語の「ジェンダー」を比較していく。

まず、「ジェンダー」という言葉は、「男と女の社会的行動や関係」(D. カメロン 2003)を表す語として用いられる。主に、男性は男性らしく、女性は女性らしくあるべきだという考えである。具体的には、「仕事は男性が行うもので、家業は女性が行うものである」などの文化的または社会的な性役割が挙げられる。このような社会における性役割の概念が、人文科学における現象の解明に必要不可欠となり、言語の研究にも影響を与えた。

「ジェンダー」と言語の関係性は、社会言語学や語用論、言語人類学の分野において研究され始めた(中村、2001)。また、「言語とジェンダーの研究」は、主に会話におけるジェンダー・アイデンティティの構築を明らかにするために行われるようになった。言語における「ジェンダー」とは、主に文法的な「性」(gender)を指し、名詞クラスを分類する際に用いられる(齊藤 2015)。この論文で比較対象となるドイツ語とスペイン語の名詞も文法上の「性」を帯びている。

1.2ドイツ語の「ジェンダー」

ドイツ語の名詞の「ジェンダー」(Geschlecht)は、「男性」、「女性」、「中性」の3つに分類される。指示対象が人である場合、指示対象の生物学的な「性」と名詞の文法的な「性」は一致する。しかし、ド

イツ語の人を表す名詞の中には、「男性」と「女性」以外に「中性」を文法的な「性」として持つものもある。例えば、Fräulein ((未婚の)女性)、Mädchen (女の子)、Kind (子供)、Mitglied (構成員)などが挙げられる。このように、文法の「性」と生物学的な「性」が一致しない場合もあるが、その例はわずかであり、通常は指示対象が男性であれば「男性 (形)」を、女性であれば「女性 (形)」を使う (人見 2012)。

人を表現する名詞は、男性形が標準形で無標であるとされている。一方で女性形は、標準形つまり男性形に接尾辞 -in を付けることで作られる。例えば、男子学生を意味する Student という単語の女性形は、Studentin となる。人を表す名詞の女性形が形成された理由は2つ考えられる。1つは、人を表す名詞の男性形は、文脈次第では男性と女性の両方を表す際に男性形を保持するため、女性の存在が隠されてしまっていると考えられるからである。Pusch(1984)⁴が示した例文から考えてみる。

(例) „Der Inhaber dieses Passes ist Deutscher“.
このパスポートの所持者はドイツ国籍を持つ

この例文では、「このパスポートの所持者」(Der Inhaber dieses Passes)は男女両方に言及していると捉えられるが、文法上の「性」は男性形となっている。

もう1つは、1970年代にアメリカで盛んに行われたフェミニズム言語学の研究がドイツ語に影響を与えたことが考えられる。当時のアメリカでは、男女平等の社会を求める動きに伴い、フェミニズムの観点から「言語と性差」が問題視されるようになり、フェミニズム言語学が展開された。アメリカのフェミニズム言語学の影響を受け、ドイツでは Senta Trömel-Plötz が、ドイツ語における「言語と女性」を意識させる必要性を論文において主張した (保阪)。それゆえ、ドイツ語の「言語と性差」の研究が注目され始めた。そして、フェミニズム言語学の観点から、男女の不平等さを言語においても解消するために、男性形に対して女性形が作られたと考えられる。ただし、Trömel-Plötz は、女性形が有標として扱われるという点や、男性より女性のほうが劣っているという考えが言語

に未だ反映しているという点を認識する必要がある、と強調しており、ドイツ語におけるフェミニズム言語学に問題が残されているということがわかる。

フェミニズム運動の高揚とともに、人を表す名詞の女性形の形成が盛んに行われたことから、ドイツ語では、社会の「ジェンダー」の概念に基づいて人を表す名詞の文法的な「性」と、名詞が指す対象の生物学的な「性」を一致させていると考えられる。その名詞の特徴としては、職業名詞や国籍などの身分を表す名詞、家族や親族を表す名詞などが挙げられる。

1.3 スペイン語の「ジェンダー」

スペイン語の「ジェンダー」(género)は、「男性」と「女性」の2つに分類される。スペイン語の起源となるラテン語の名詞には「中性」が存在したが、スペイン語が形成される過程で「男性」または「女性」のいずれかに集約されたため、スペイン語には「中性 (形)」が残されていない。そのため、名詞には「男性」と「女性」の二項対立がより明確に現れている。この二項対立においては、「男性」が無標として扱われる。

人を表す名詞に関しては、ドイツ語と同様、文法上の「性」と指示対象の「性」を一致させ、「男性 (形)」・「女性 (形)」という対をなす名詞においては、「男性には『男性 (形)』、女性には『女性 (形)』』という一致が求められている (糸魚川 2005)。「男性」・「女性」という対をなす名詞では、「男性 (形)」の名詞は接尾辞 -o、「女性 (形)」の名詞は接尾辞 -a で終わることが多く、それぞれの「性」に一致させるための名詞の形を形成する際には、その「性」の接尾辞に変化させるか、付け加えて、性一致を行う。例えば、「弁護士」という単語はもともと男性名詞 abogado であったが、女性も弁護士という職に就くようになり、接尾辞 -o を -a に変えて、abogada という女性形を新たに形成した。このように、スペイン語においても人が関わる名詞の女性形の形成が見られる。スペイン語の女性名詞化の動きは、ドイツ語と同じようにフェミニズム運動の隆盛に影響を受けたものであるが、両言語においても、このような名詞の女性化は「社

会的カテゴリーである性別を基準とした二分法の実践」(糸魚川 2003) であると考えられる。

ドイツ語と同様に、スペイン語の人を表す名詞も文法上の「性」と指示対象の生物学的な「性」を一致させる傾向にある。しかし、スペイン語には「男女共通名詞(nombre del género común)」という名詞が多く存在する。男女共通名詞とは、男女同形で、冠詞や形容詞、代名詞によって指示対象の性別を示す名詞のことを指す(山村、2003)。例えば、estudiante(学生)という単語は、男子学生あるいは女子学生を意味し、定冠詞などの性別を示す機能がなければ、「性」は明示されない。男女共通名詞の多くは接尾辞 -e で終わるという特徴がある。ドイツ語のように「中性」を文法的な「性」として持たない代わりに、「性」の明示をしないという機能を利用し、男女共通名詞を中立的な表現として用いる場合がある。

2. 性的少数派と言語の「ジェンダー」

2.1 社会⁵における性的少数派

ヨーロッパでは近年、性的少数派の権利が法によって守られることが多くなり、性的少数派に対する周囲の認識も高まってきている。ヨーロッパの中でも、スペインは性的少数派に対して比較的寛容で、政策のみならず、文化的にも寛容な姿勢をとっている。例えば、スペインのマドリード(Madrid)で行われる”Madrid Pride”(マドリード・プライド)など、性的少数派の権利を訴えるイベントや運動が盛んに見られる。これに対しドイツは、性的少数派への対応や政策においてスペインに遅れをとっているが、ベルリンでもマドリードと同様のイベントや運動が行われたり、2017年6月30日に異性間と同性間の婚姻の完全な平等を認める法案が可決されたりしたため、少しずつではあるが、性的少数派を含め、多様な「性」の在り方を受け入れる動きが見えるようになってきていると考えられる。

2.2 文法上の「性」と性的少数派

前述したように、ドイツ語とスペイン語は、文法的な「性」を持ち、人に関わる名詞の場合には、

指示対象の生物学的な「性」と名詞の文法的な「性」を一致させる。過去に名詞の女性化が行われ、「性」を二分化する動きが見られたことから、このような性一致の傾向は維持されることが考えられる。しかし、糸魚川が「ジェンダー化された言語のゆくえ」(2005)において、「女性(形)化の推奨には、性別を越境する人々への視点が欠如している」と述べているように、女性名詞化を行うことで、人を表す名詞の文法的な「性」を二分化されてしまうため、「男性」か「女性」の2つしか選択肢がなく、性的少数派の一部の人たちにとって不利となる。例えば、性自認⁶が男性でも女性でもない、Xジェンダーと呼ばれる人たちは、どちらを選べばよいのかという問題が出てくる。また、性一致の傾向に関しては、学校や公的な場において当事者が発話する際、見た目または生まれつきの身体的な「性」に性一致させるのか、自分自身の意識の中にある「性」に性一致させるのかという問題も考えられる。

2.3 非性差別的言語使用の提案

人を表す名詞の文法上の「性」が性的少数派の言語使用に影響を与えているという、新たな「言語と性差」に関する問題を解決するために、非性差別的な表現が推奨されてきた。この動きは、ドイツ語とスペイン語の両言語において見られるものである。具体的には、人を表す名詞の男性形が「女性」を隠蔽しているという考え方から、「男性」の包括的な表現を避けるために推奨された代替表現を、性的少数派の人たちも用いることができるといった提案や、特に若者たちによって使用されている代替表現の奨励などがある。ドイツ語では、Technische Universität Dortmund(ドルトムント工科大学)などにより提案がなされ、スペイン語ではUNESCOやUniversidad de Sevilla(セビーリャ大学)などにより提案が行われた。両言語において、非性差別的な表現が奨励されてきたという点は共通しているが、語の形成過程には相違点があるのではないと思われる。次の章では、実際に提案された例を紹介しながら、ドイツ語とスペイン語における、「性」を明示しない表現の形成過程を考察していく。

3.「性」の明示を避ける表現

3.1 ドイツ語の場合

ここでは、ドイツ語における「性」の明示を回避する表現を3つに分類する。1つ目は、記号を用いる表現、2つ目は中立的な表現、3つ目は現在分詞を名詞化した単語を使う表現である。提案例は、ドルトムント工科大学が示したものと、保坂が「ドイツ語とフェミニズム言語学」において記述しているものを引用する。

3.1.1 記号を用いる表現

すでに提示されている例を見ると、記号を用いる表現には主に3つの種類があると考えられる。3つの種類に共通して、「学生」を意味する単語を例に用いる。

まずは、スラッシュを使う表現である。スラッシュを用いて「学生」を表す場合、Student/in と表記する。このような表記により、「学生」という単語の男性形と女性形が共存し、どちらの「性」であるかを示していない。

次に、アンダーハイフン () を使用する表現である。アンダーハイフンは、前述したスラッシュと同じ位置に配置する。つまり、Student_in となる。スラッシュと同様、男性形と女性形を共存させ、「性」を明示させないようにしている。

最後に、アスタリスク (*) を用いる表現を見ていく。アスタリスクの位置はスラッシュ、アンダーハイフンの例と同じである。したがって、「学生」を表す際には、Student*in と表記する。3つに共通するのは、記号の位置と、男女共存の形を作ることである。

保坂の研究によると、スラッシュを用いる表現は、「見た目の悪さもそれほどではないとされ、求人広告などでよく見られるようになった」ようである。しかし、スラッシュを含めた記号を用いる方法には、発音ができないという問題点が指摘されている。また、使用する人たちは、意識的に単語を使わなければならないと思われるため、使用する際に多くの労力を使わざるを得ないと考えられる。

3.1.2 中立的な表現の方法

「性」を表さないようにするために、中立的な表現の推奨が行われた。「人」を意味する -person を使用したり、「～の職業に就いている人」を意味する -kraft を用いたりすることによって、中立的な表現を作るのである。例えば、Lehrer (教師) という単語は、-kraft を用いると Lehrkraft と表すことができる。これらのような中立的な表現が文の中で使われている例は記されていないため、具体的にどのような状況で使われるのか、どのような使用法が認められているのかという考察は難しい。だが、記号で表している例と違い、発音が可能であるため、発話において支障はないと考えられる。また、-person や -kraft は意味を持つので、聞き手の理解にも差し支えないだろうと考えることができる。

3.1.3 現在分詞の名詞化

最後に、現在分詞を名詞化したものを考えていく。保坂によると、現在分詞を名詞化した単語の提案は、広範囲にわたり受け入れられてきたようである。現在分詞が名詞化された例としては、「学生」を表す場合、studieren(勉強する)という動詞を studierende という現在分詞に変化させ、最終的に Studierende⁷ と表記する。「学生」の他に「教師」を表す Lehrer も、現在分詞を名詞化することにより、Lehrende と表すことができる。現在分詞を名詞化することによって、「性」の表示がなくなるため、「性」の明示を回避する表現として用いることができると考えられる。保坂が記述したものや、ドルトムント工科大学が記したものの中では、「学生」や「教師」の例だけが見られるが、人に関わる名詞の中で、「動き」があるもの(「学生」であれば「勉強する」が「動き」にあたる)があれば、その「動き」を動詞で表し、その動詞を現在分詞に変化させ、最終的に名詞化するという方法を用いることができるのではないだろうか。

3.2 スペイン語の場合

一方で、スペイン語でも「性」の明示を回避する表現が提案されているが、その中で、ドイツ語と同じような表現方法を用いるものと、異なるも

のが存在する。まず、類似した表現方法の中で、記号を用いる表現と、中立的な表現の例を挙げる。そして、ドイツ語とは異なる表現方法を用いるよう推奨されている例を1つ紹介し、スペイン語では性的少数派のために提案された語形成の例にどのような特徴があるのかを考察する。

3.2.1 -@, -x の使用

電子メールの普及やインターネットの普及により、アットマークを語尾につけ、「性」の明示を避けようとする表現が見られた。セビーリャ大学が示した例によると、「生徒」を表す単語 *alumno/a* の複数形 *alumnos/as* を、**alumn@s⁸* と記すということになる。アットマークは、「男性」の語尾 *-o* と、「女性」の語尾 *-a* を一度に示すことができ、男女の順番をつけずに両性を表すことができるために使われるようになった(糸魚川 2005 p.91)。その後、ソーシャルネットワーキングサービス(以下、SNS とする)などにおいても、性的少数派が性を明示しないために用いるようになった。また、筆者が独自に行ったアンケート⁹(最終更新 2017年9月4日)において、『子供』を意味する *niño* という単語を『性』の明示を避けて表現する場合、どの単語を用いるか』という質問に対し、性自認が「男性」である1名の回答者から、**niñ@* を使用するという答えがあった。しかし、アットマークを語尾に付加すると発音ができないため、あくまでも書き言葉のみでの使用となる点や、書き言葉として使ってもわかりにくい、といった点が問題となるだろう。

3.2.2 *persona*, *personal* の使用

「人」を表す名詞 *persona* または *personal* を中立的な表現として用いることができる。両者は両性共通名詞であり、*persona* は女性名詞、*personal* は男性名詞であるが、指示対象の「性」に合わせて文法的な「性」が変化することはない。「人」を表す *persona* または *personal* と共に、「～の」を表す前置詞 *de* を使うことで「～の人」を表すことができる。例えば、UNESCO が発表した『言語使用の非性差別的使用の奨励』において、「パイロット」を意味する *piloto* の複数形 *pilotos/as* は、*el personal de vuelo* と表されている。1語で示せるも

のを、複数の語によって表すことは労力を使うが、*persona de* または *personal de* の形を作ることで、人に関わる名詞を形成し、「性」を明らかにすることを回避できると考えられる。

3.2.3 語尾 *-e* の使用

前述したとおり、スペイン語の人を表す名詞の語尾に関しては、男性名詞または男性形の語尾は *-o* で終わり、女性名詞または女性形の語尾は *-a* で終わる。しかし、語尾が *-o* または *-a* で終わるもの以外に、*-e* で終わる名詞も見られる。特に、男女共通名詞によく見られる。例えば、「学生」という意味の *estudiante* は、「男性」・「女性」の両方に用いることができる。男女共通名詞のように、名詞の語尾に *-e* を用いる提案が見つかった。ダニエラ財団(Fundación Daniela)¹⁰に所属する Pau 氏が、三人称単数の代名詞 *él* または *ella* に加え、性的少数派のための代名詞として **elle* を正式に使用しようすることを訴えた。Pau 氏の提案の中には、代名詞のことについての記述は見られたが、人を表す名詞の語尾として *-e* を用いることについて具体例などは示されていない。しかし、**elle* の推奨から、中立的な語尾として *-e* を用いようとする試みがあることは考えられる。また、3.2.1 で取り扱ったアンケートの回答の中で、「子供」を表す単語 *niño/a* の代わりに、「**niñe* を使う」と回答した人が1名いたことから、「性」の明示を回避できる可能性として *-e* を用いる方法があるのではないかと考えられる。だが、Pau 氏の提案について書かれていた記事の中で、接尾辞 *-e* の使用は文法範疇から外れるとして、言語学者から批判されている。

4. 新たな語形成の提案の比較

ドイツ語とスペイン語における「性」の明示を回避する表現には、共通点と相違点が存在することがわかる。両言語に共通することは2点考えられる。1つは、電子メールやSNSなどの媒体が普及したことにより、記号を用いて「性」を明示しないようにしたことである。もう1つは、「人」を表す名詞を中立的な表現として用いることである

(ドイツ語では -person, スペイン語では persona/personal)。一方で、別の中立的な表現として、ドイツ語では現在分詞を名詞化する提案がなされたが、スペイン語ではそのような提案は見られず、新しい語尾を用いることが推奨された(接尾辞 -e の使用)。ドイツ語とスペイン語の「性」の明示を避ける表現を比較すると、以下のようにまとめることができる。

・ドイツ語とスペイン語の「性」の明示を回避する表現の比較

- (1) 電子メールまたはインターネット上の書き言葉として、名詞に記号を付ける。
- (2) 「人」を意味する単語を用いて中立的な表現をつくる。
- (3) ドイツ語では、現在分詞を名詞化し、スペイン語では「性」を示さない新たな語尾を用いて「性」を明示する表現をなくす。

(1)の考察から、人に関わる名詞に記号を付けた語は、発音できないという点があり、発話の場面において重要な提案となるかは疑問である。中村(2010)によると、「自らのアイデンティティを表現する場合にも、ことばは重要な役割を果たし、相手の話し方によってその人の性的アイデンティティを決めつけることもありうる」という記述からも、性的少数派の言語使用の問題は、発話におけるものであると考えられる。しかし、発音不可能な文字を用いた表現は、相手との相互理解のため、発話には適切ではないと思われる。したがって、記号を用いた表現は、電子メールやインターネット上で使う表現として使用できる可能性はある。

さらに、「人」を表す名詞や、現在分詞の名詞化、「性」を明示しない語尾の使用などは、中立的な表現として提案され、発音も可能なため、発話時に使用できる可能性はある。したがって、ドイツ語とスペイン語では、用いられる表現に違いは見られるが、記号を使う背景や、中立的な表現を作る過程が共通していると考えられる。

5. まとめ

社会が多様な「性」の在り方を認めるようになってから、性的少数派の人たちによって、「性」の明

示を避ける表現の使用が訴えられてきた。確かに、性的少数派は、新しくつくった言葉を意識的に使ったり、反対に、性的少数派への差別や偏見がいまだに残っている環境では、身の安全のために性別二元論¹¹に基づく言葉づかいをしたりする(中村2010)ため、新しい語を使おうとすると、性的少数派の人たちにとって大きな負担となりうる。しかし、語族が異なるドイツ語とスペイン語において、用いている表現に違いは見られるが、性的少数派の人たちが求める中立的な表現を作る背景や語形成の過程に共通点が見られることに意味があり、両言語において「性」を明示しない表現が必要とされていることを重視する必要があると考えられる。したがって、この論文で例として挙げた「性」の明示を回避する表現は、使用を希望する人口がより多くなれば、私的な場でも公的な場でも用いることができる可能性を認めても良いのではないかと思われる。今後は、「性」の明示を回避できる表現に対する、年齢や地域による好感度の違いを考慮することを課題とし、性的少数派と言語使用の関係についての研究をより進めていきたい。

註

- 1 性的少数派には、同性愛者や両性愛者、自己意識の中の「性」と身体「性」が一致せず、既存の性役割にとらわれない形で生活を望むトランスジェンダー、認識してい「性」が「男性」でも「女性」でもない、Xジェンダーなど、様々なアイデンティティの「性」を持った人たちが存在する。
- 2 この論文では、ドイツで話されているドイツ語を扱う。
- 3 この論文では、スペインの国家語であるカスティーリャ語を扱う。
- 4 Puschの例文は、保阪の「ドイツ語とフェミニズム言語学」において記述されていたものを引用した。
- 5 この論文では、ドイツとスペインの社会に限定する。
- 6 性自認とは、自己の性別の認識で、「自分は男である」、「自分は女である」または「自分は男性でも女性でもない」などと自認することであると定義されている。(針間2016)
- 7 現在分詞と違い名詞化された単語の頭文字が大文字になっているのは、ドイツ語の名詞の頭文字は大文字で記されるという特徴のためである。
- 8 文法的に正しくないものにはアスタリスク(*)を用いる。
- 9 Google Formを用いてアンケート調査を行った。
- 10 トランスジェンダーを支持する団体。
- 11 女性として生まれたならば、自己の認識は「女性」となり、男性として生まれたならば、自己の認識は「男性」となるのが「当然」であり、性別は男性と女性の2種類であるとする理論を指す。

参考文献

- 飯島一泰(2006):「ドイツ語とドイツ文化の多様性」、『ヨーロッパ世界のことばと文化』、成文堂、110-112
- 糸魚川美樹(1997):「スペイン語における女性形職業名詞—女性形名詞形成の背景と女性形が持つ意味合い—」、『HISPANICA』41号、日本イスパニヤ学会、13-21
- (2003):「男の表され方」にみるカスティーリャ語のジェ

ンダーに関する考察』、『HISPANICA』47号、日本イスパニヤ学会、123-131

(2005) : 「ジェンダー化された言語のゆくえ」、『社会言語学』5号、「社会言語学」刊行会、85-103

斎藤純男 他編 (2005) : 『明解言語学辞典』、三省堂

土井裕文 (2013) : 「スペイン語における -e で終わる名詞の性」、『情報コミュニケーション学研究 2013』第13号、明治大学 情報コミュニケーション学部、31-45

中村桃子 (2010) : 『ジェンダーで学ぶ言語学』、世界思想社。

針間克己 (2016) : 「セクシュアリティとLGBT」、『こころの科学』189号、日本評論社、8-13。

人見明宏 (2012) : 「ドイツ語最重要名詞の性について」、79-81

保阪良子 : 「ドイツ語とフェミニズム言語学」、141-165

山田善郎 監修 (1995) : 『中級スペイン文法』、白水社

山村ひろみ (2003) : 「職業名詞に見る『男』と『女』の表され方—日本語とスペイン語の対比から—」、『言語と文化のジェンダー』、九州大学大学院言語文化研究院、85-105

UNESCO: Recomendaciones para un uso no sexista del lenguaje, Paris. (発表年度不明)

Universidad de Sevilla: Herramientas para el uso del Lenguaje no sexista (発表年度不明)

・ウェブ上の記事

[1] “La lengua no tiene sexo: ‘Elle está cansade’”, EL Español 2017 6.18,

http://www.elespanol.com/cultura/20170617/224478043_0.html (最終アクセス日: 2017年7月26日)

[2] “The Development of Gender-Neutral Pronouns Across Various Languages”, Fusion 2017 5.19

<http://ohiofusion.com/gender-neutral-pronouns-various-languages/> (最終アクセス日: 2017年7月24日)

[3] “Gendersensible Sprache”, Universität Dortmund, 2017 (最終アクセス日: 2017年10月7日)

https://www.fk-reha.tu-dortmund.de/fk13/de/Studium_und_Lehre/Projektstudium/Gendersensible-Sprache---to-go-Homepage.pdf

[4] “Warum wird genderneutrale Sprache im Deutschen kaum verwendet? “ Queer-bento.de 2016.4.12 (最終アクセス日: 2017年10月7日)

<http://www.bento.de/queer/warum-wird-genderneutrale-sprache-im-deutschen-kaum-verwendet-178634/>